

審査の結果の要旨

氏名 高櫻綾子

本論文は、3歳時期の幼児の発達について、保育の場における長期縦断参加観察から、幼児二者間の関係性と相互作用の関連に焦点を当て、幼児間の親密性を分析検討したものである。論文は4部8章から構成される。

第Ⅰ部では、親密性の射程として、第1章において幼児期における仲間関係と親密性に関する理論並びに先行研究を整理概括している。続く第2章では、幼児間における親密性を検討するにあたり、「関係性の親密さ」と「相互作用の中に生じる親密さ」の2軸を提起し、親密性の形成過程、親密性を示す特徴、幼児期の発達における親密性の意義の検討という3分析視点を導出している。そして第3章では、これらの分析視点に基づき、親密性を捉える方法論について、保育所における縦断的・横断的参加観察に基づく事例研究法の妥当性と必要性を論じている。

第Ⅱ部では、親密性の形成過程を検討している。第4章では、3歳児2名1組の1年間の親密性形成において萌芽、成立、危機、進化の諸相がみられ、各々第三者の拒否、第三者への意識の広がり、第三者の二者間への介入と援助、さらなる関係の発達を生み出す様相を記述し、2者間の親密性がその後の仲間関係形成の基盤となり、園生活での活動の足場となる点を指摘している。第5章では、幼児期の親密性を、「自発性」・「対等性」・「互惠性」の3点から定義し、各々の獲得時期および関係性と相互作用の特徴を整理している。

第Ⅲ部では、幼児間の相互作用における親密性を示す特徴として「ね」発話に注目し、第6章では「ね」発話の機能カテゴリーを15に分類し、親密性の形成・深化と共に「ね」発話の使用の質が変化することを明らかにしている。また続く第7章では、関係性の認知に基づいて「ね」発話を幼児が使い分けており、会話の聞き手となる他児の反応に応じて「ね」を選択使用していること、また終助詞「ね」と「よ」について、「よ」が正確な理解を求め遊びの方向性の維持と展開のために使用されるのに対し、「ね」が共感や一体感という共に遊ぶことへの志向性をもって使い分けをしている点を事例から示している。

第Ⅳ部では、これらの観察事例研究を踏まえ総括し、幼児間における親密性の発達の意義を総合的に考察し、本論文の理論的課題や発展すべき点など、今後の課題を論じている。

本論文は、幼児期初期3歳における2者間の親密性の形成過程を精緻な記述研究によって初めて明らかにし、その関係が保育実践においてもつ意義や生涯にわたる他者との対人関係の基礎となる側面を示した点で独自性がある優れた学術論文であり、これからの保育学・教育学研究に新たな視座を提示した論文であると高く評価された。よって、本論文は、博士（教育学）の学位を授与するに十分にふさわしい水準にあるものと判断された。